春期福音特別集会（２）（京都）

聖徒の祈り

――ヨハネ黙示録第４～５章――

１９８４年６月10日
小池辰雄

天に開けたる門あり　四つの活物　御霊の磁場　『羔の婚姻』「饗宴篇」の第二歌　巻物と七つの封印　屠られたるが如き羔羊　キリストの十字架と聖霊を通る　無的実存　「饗宴篇」の第三歌　十字架・聖霊の二焦点　無的実存の自由な表れ　万象帰一

【ヨハネ黙示録４】

1この後われ見しに、視よ、天に開けたる門あり。初に我に語るを聞きしラッパのごとき声いう『ここに登れ、我この後おこるべき事を汝に示さん』2直ちに、われ御霊に感ぜしが、視よ、天に御座設けあり。3その御座に坐したもう者あり、その坐し給うものの状は碧玉・赤瑪瑙のごとく、かつ御座の周囲には緑玉のごとき虹ありき。4また御座のまわりに二十四の座位ありて、二十四人の長老、白き衣を纏い、首に金の冠冕を戴きて、その座位に坐せり。5御座より数多の雷光と声と雷霆と出づ。また御座の前に燃えたる七つの燈火あり、これ神の七つの霊なり。6御座のまえに水晶に似たる玻璃の海あり。御座の中央と御座の周囲とに四つの活物ありて、前も後も数々の目にて満ちたり。7第一の活物は獅子のごとく、第二の活物は牛のごとく、第三の活物は面のかたち人のごとく、第四の活物は飛ぶ鷲のごとし。8この四つの活物おのおの六つの翼あり、翼の内も外も数々の目にて満ちたり、日も夜も絶間なく言う『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔在し、今在し、後来りたもう主たる全能の神』9この活物ら御座に坐し、世々限りなく活きたもう者に栄光と尊崇とを帰し、感謝する時、10二十四人の長老、御座に坐したもう者のまえに伏し、世々限りなく活きたもう者を拝し、おのれの冠冕を御座のまえに投出して言う、11『我らの主なる神よ、栄光と尊崇と能力とを受け給うは宜なり。汝は万物を造りたまい、万物は御意によりて存し、かつ造られたり』

【ヨハネ黙示録５】

1我また御座に坐し給う者の右の手に、巻物のあるを見たり。その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。2また大声に『巻物を開きてその封印

を解くに相応しき者は誰ぞ』と呼わる強き御使を見たり。3然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を見得る者なかりき。4巻物を開き、これを見るに相応しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きいたりしに、5長老の一人われに言う『泣くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの萌蘖、すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得るなり。6我また御座および四つの活物と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、之に七つの角と七つの目とあり、この目は全世界に遣されたる神の七つの霊なり。7かれ来りて御座に坐したもう者の右の手より巻物を受けたり。8巻物を受けたるとき、四つの活物および二十四人の長老、おのおの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前に平伏せり、此の香は聖徒の祈祷なり。9斯て新しき歌を謳いて言う『なんじは巻物を受け、その封印を解くに相応しきなり、汝は屠られ、その血をもて諸種の族・国語・民・国の中より人々を神のために買い、10之を我らの神のために国民となし、祭司となし給えばなり。彼らは地の上に王となるべし』

11我また見しに、御座と活物と長老たちとの周囲における多くの御使の声を聞けり。その数千々万々にして、12大声にいう『屠られ給いし羔羊こそ、能力と富と智慧と勢威と尊崇と栄光と讃美とを受くるに相応しけれ』13我また天に、地に、地の下に、海にある万の造られたる物、また凡てその中にある物の云えるを聞けり。曰く『願くは御座に坐し給うものと羔羊とに、讃美と尊崇と栄光と権力と世々限りなくあらん事を』14四つの活物はアァメンと言い、長老たちは平伏し拝せり。

●天に開けたる門あり

あなた方はみな選びの器です。どうぞ、しっかり自覚してください。この召団は決していい加減なものではない。本当に今は世界的な精神的非常時です、危機的現実です。その時に、キリストの直弟子の――ペテロ、ヨハネ、パウロ――こういう次元に我々は生きていなかったら、クリスチャンではない。はっきりとそう思います。どうぞ、しっかり、キリストに、神さまに鍛えられてください。

では、黙示録第４章にはいります。

1この後われ見しに、視よ、天に開けたる門あり。

３章８節にも、

「門が開けていた」

とあった。我々にとっては常に――地上は八方塞がりで構わない――しかし、天門は開けている。これを無門の門という。天門そのものはキリストです。

初に我に語るを聞きしラッパのごとき声いう『ここに登れ、我この後おこるべき事を汝に示さん』

素晴らしい啓示ですね。ヨハネ黙示録というのは、本当に繰り返し祈りをもって読んでください。私はただ糸口を申し上げるだけですから。

2 **直ちに、われ御霊に感ぜしが、**

1章10節にもあったように、これはエクスタシーの状態です。恍惚という訳はあまりよくない。本当に霊にあってはっきり目覚めている。私は時々、夢の中でエクスタシー的なところに入ることがありますが、その時は本当に夢でない。普通の現実以上の現実で、はっきりしている。これが

「御霊に感ぜしが」

ということです。

視よ、天に御座設けあり。3その御座に坐したもう者あり、その坐し給うものの状は碧玉・赤瑪瑙のごとく、かつ御座の周囲には緑玉のごとき虹あり。

これらはエゼキエル書第1章にも出ている。素晴らしい燦然たる輝きです。この4章のところは神の御座の光景ですから、とても想像がつかない。すべて色が全部光っていますから。我々が空に見る虹のもっと強烈なものです。

4また御座のまわりに二十四の座位ありて、二十四人の長老、白き衣を纏い、首に金の冠冕を戴きて、その座位に坐せり。5御座より数多の雷光と声と雷霆と出づ。

色ばかりでなくて、今度は音です。音の世界で凄い響きが伝わってくる。これはベートーヴェンの交響楽もかなわないでしょう。

●四つの活物

また御座の前に燃えたる七つの燈火あり、これ神の七つの霊なり。6御座のまえに水晶に似たる玻璃の海あり。御座の中央と御座の周囲とに四つの活物ありて、前も後も数々の目にて満ちたり。7第一の活物は獅子のごとく、第二の活物は牛のごとく、第三の活物は面のかたち人のごとく、第四の活物は飛ぶ鷲のごとし。

「獅子」というのは、悪い意味では傲慢の象徴ですが、この場合は権威の象徴です。ダンテの『神曲』にでてくるあの獅子は傲慢の象徴です。「牛」は力の象徴。「人」は智慧、叡智、「鷲」は空を飛びますから非常に自由な活動性、そういうものの象徴です。これが讃美しようというわけです。

8この四つの活物おのおの六つの翼あり、翼の内も外も数々の目にて満ちた

り、

「六つの翼」とは、イザヤ書6章にも出て来ます。この「六つの翼」の意味あいを、畏敬の念と謙虚の念と自由とに解釈する――飛ぶ翼は自由であり、足を覆っているのは謙虚な姿で、顔を覆っているのは畏敬の念である――という解釈がありますが、私は結構だと思います。

今の青少年は、畏敬の念や感謝の念が非常になくなってしまった。彼らが悪いのではない。親と教育者が悪い。はっきりとそういうことを諭さないからいかん。子供を甘やかしてはいかん。世の中がどうであろうと、社会がどうであろうと、我々神の民ははっきりした姿勢でもっていかなければいかん。学校では教育はもうダメなんだ。知識は授けるかも知れないが、本当の意味における「エアツィーウング」という鍛錬的な薫育はできない。これはむしろ信仰の人たちがやらなければしょうがない。

平伏、謙虚それから自由ということ。魂の自由です。ソ連や中国にはこの自由がないので、本当に気の毒に思います。人間の魂はそれぞれ本当の自由をいただいている。ただ、間違った自由は困るけれども。私は人間でなければ、鳥になりたいな。本当に自由に飛べるから。

「数々の目」とは、目はもちろん見るものですから、外に対する認識です。内側にも目があるから、内側に対するところの洞察の力です。外観内視とでも言いますか。ゲーテという詩人は正にそのような目の詩人です、実によくものを洞察する力を持っている。直感力が強い。花を見て、

「花は葉の変形である」

とはゲーテが言いだしたことです。

日も夜も絶間なく言う『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、昔在し、今在し、後来りたもう主たる全能の神』

ここのところは「昔」が先になっている。しょっちゅう「

南無阿彌陀佛」

を称うようなぐあいに、

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」

と言う。ヘブライ語では「カードーシュ」という。ここではギリシア語で「ハギオス」です。

「全能の神」は

「ホ　テオス　ホ　パントクラトール」

「昔在まし」は

「ホ　エーン」

「今在まし」は

「ホ　オーン」

「後来りたもう」は

「ホ　エルコメノス」
という。そういう素晴らしい簡単な表現ですけれども、
「過去・現在・未来の歴史を掌握したもうところの永遠の全能の神」
ということです。そういう響きが伝わっているという。

9この活物(いきもの)ら御座に坐し、世々限りなく活きたもう者に栄光と尊崇(とうとき)とを帰し、
感謝する時、10二十四人の長老、御座に坐したもう者のまえに伏し、
これも平伏(ひれふし)です。

世々限りなく活きたもう者を拝し、おのれの冠冕(かんむり)を御座のまえに投出して言う、

「冠冕を御座のまえに投出し」というのは非常に素晴らしい姿です。みな本当の平伏しの畏敬の姿です。「冠を投げ出す」というけれども、実は自分自身が投身されている姿です。我々は「はい」と答えるでしょ。「はい」とは
「拝」する（二つの手をあわせる）
という字からきている。だから、「はい」という返事は相手に対して畏敬の念を持った返事なんです。

11『我らの主なる神よ、栄光と尊崇(とうとき)と能力(ちから)とを受け給うは宜(うべ)なり。汝は万物(ばんもつ)を造りたまい、万物は御意によりて存し、かつ造られたり』

簡単ですが、本当に全体を掌握したような大きな言葉です。

●御霊の磁場

コロサイ書1章に、

「9この故に我らこの事を聞きし日より汝等のために絶えず祈り、かつ求むるは、汝ら霊のもろもろの智慧と悟りとをもて神の御意を具(つぶさ)に知り、

霊をもってですよ。この「智慧」は「エピグノーシス」です、単なる「グノーシス」ではない。「エピ」というのは「グノーシス」を越えたものという意味です。

10凡てのこと主を悦ばせんが為に、その御意に従いて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り、

「業によって果を結び、神を知る」ということは大事なことです。ゲーテが、
「行為によって認識する」（ドゥルヒ　タート　エアケンネン）
と言いました。頭で認識するのではない。実存で認識する。
「神さまを分かろうと思ったら、本当の実存をせよ」
ということです。本当に生きないで、
「神はどうのこうの」
なんて、理屈をこねたような神学はひとつも神学ではない。「いよいよ神を知り」とは本当は、

「神の智において増し加わり」
というような表現をしている。

11また神の栄光の勢威に随いて賜うもろもろの力によりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐え、12而して我らを光にある聖徒の嗣業に与るに足る者とし給いし父に感謝せん事なり。」（コロサイ1・9～12）

パウロは全部、体験からものを言っていますから。どんなことがあっても、歓びを失わない。欣然としているわけです。

「艱難に遇えばあうほど喜べ」

なんて、ペテロも言っている。それは、力んだって喜べませんよ、喜びの源泉は聖霊ですから。聖霊はあらゆる内容を持っています。聖霊というのはただ聖きというものではない。無量の内容を持った霊です。何ものにも負けない霊ですから。だから、うれしいんです。全く今のキリスト教の世界はこの聖霊からズレてしまっているから、使徒たちは天界で嘆いているよ、嘆いたり、憤慨したりしている。

今日はペンテコステです。だから、この時間全部が祈りの世界です。語るも聞くも同じこと、御霊の中を我々は動いているわけです。御霊の磁場の中に我々はいる。日常で普段に、ハタと、パッと気がついてくださいよ、

「ああ、自分は聖霊の中にいた。聖霊に包まれ、支えられ、貫かれていた」

と。我々は無意識に空気を吸っているでしょ。肉体は絶対に空気から離れられない。空気に包まれ、空気を吸い、血はきれいにされている。見たところは空である。空気とは素晴らしい言葉だ。空であるが、充満しているのがこの気なんです。本当は充気なんだ、充ち満ちている。それで我々の肉体は生きている。我々の魂は、霊はキリストの霊気で生きているわけです。霊気を呼吸している。本当に「生きている」というのは、

「魂が霊気を呼吸している、霊気に貫かれている」

こと。私はもう

「信仰」

なんていう言葉は面倒臭くなってしまった、信仰なんていって二段構えで考えるようなことは…（異言）…。そういう霊気の世界にいるんです。

13父は我らを暗黒の権威より救い出して、その愛しみ給う御子の国に遷したまえり。14我らは御子に在りて贖罪すなわち罪の赦を得るなり（得ているのである）。15彼は見得べからざる神の像にして、

神さまは見えない。けれども、キリストは神の「影像」――「エイコーン」というギリシア語ですが――にして、

万の造られし物の先に生まれ給える者なり。16万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるいは

支配、あるいは政治（まつりごと）、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり（彼へと造られているのである）。

これです。そういう、万物に超在し、貫在し、内在しているところのキリスト、またその霊です。そういう現実の中にグーッと自分を入れる。

17彼は万の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。18而して彼はその体（からだ）なる教会の首（かしら）なり、彼は始めにして死人の中より最先（いやさき）に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長（おさ）となられん為なり。19神は凡ての満足（みちたり）を彼に宿して、

「徳」という言葉は本当は「プレローマ」といって、「充（み）ち満ちたるもの」という意味です。「充満せる何ものか」を彼に宿して、

20その十字架の血によりて平和をなし（平安を与え）、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万の物をして己と和（やわら）がしむるを善しと為（し）給いたればなり。」（コロサイ１・13～20）

「平和」でなくて本当は

「平安」

です。コロサイ書１章20節までは、読んでいるとたまらんです。万象帰一なんです。万象が一に帰する。この「一」はキリストです。過去も現在も未来も、時間的なものも空間的なものも全部、キリストが中心になって動いている。イエスという霊止（ひと）は大変な方であります。これは正直、ケタ違いです。お釈迦さんだってもちろんかなわない。お釈迦さんはやっと悟ったんだから。キリストはもう生まれながらにして、ということ。しかも、非常に逆説的に、人間の弱さをどん底まで担いながら進んでいかれた。キリストを冥想していると、自分が爆発しそうになる。私は気が狂ったかな。気は狂ってないよ、

「神のためには狂えるなり」

とパウロが言ったけれども。

●『羔の婚姻』「饗宴篇」の第二歌

私の恩師の藤井先生は

『羔の婚姻』

という詩を書きました。残念ながら、これは未完成なんです。特に、この黙示録のところは終りの方で、全部お書きになりたかったのですが、中絶してしまった。先生はあと２年生きていれば完成したと思うけれども。未完成交響楽です。その「饗宴篇」というのが下篇になる。ダンテの『神曲』も三曲からなっていて、ダンテの「天国篇」みたいなものが、藤井先生のは「饗宴篇」という。キリストも饗宴がお好きだったからね。『羔の婚姻』の最後のところです。これは日本でユニークな詩です。けれども、日本の詩壇の中に藤井武は

出てこない。例外者だ。それくらい、日本の詩の世界も一般にダメなんです。水準が低い。「饗宴篇」の第二歌を少し、二、三箇所を読んでみます。

……

諸々の天の更に上なるあらゆる宇宙の
なおも外なる聖華の国と呼ばるる所
永遠よりの礎かたく
地は変わるとも山は移るとも
移ることなき高き御座よ
世の曙のさし出づる前
ここに孕みし甘き望みの
その大礼の日の近づけば
さすがにもまた聖き備えか
古びをしらぬ常夏の色
今はいよいよ鮮やかにして
不純な塵の垢ほどだにも
近づかせぬ碧玉の輝き
天の清水になおなお潔まり
邪悪は灰も残さぬまでに
焼き尽くさでは止むことをせぬ
真紅の瑪瑙ひとしお盛る
しかもまどかに被いめぐらす
虹の緑玉いや麗しく
映えては何らの和やかさ

……

その三対の翼を用いて
顔をも足をも覆いながら
飛び駆けりつつ四つの活物が
御座に座して世々限りなく生き給うものに
斯く栄光と尊きとを帰し感謝するとき
あたかも誓いしものの如く
二十四人の長老もまた等しく
座位より立ち上がりて
御座に坐し給うものの前に平伏し
而して世々限りなく生き給うものに礼拝をなし

各々両手をその額に付くるとみれば
己が戴く金の冠冕を自ら脱いで
贖われたる自由の子輩が
栄光の神に献ぐるために
類もなき献物とばかり
一斉に投げ出す御座の許
かくて造られし諸々の讃美に
答えて神の子たちの頌歌
……
汝己の聖き喜びを満たすがために
しかじかとあれと
望み給ひしただその故に
宇宙は既に永遠の昔
量り知られぬ御思いの淵に
なお形なきものとしてありまたその故に時の太初に
いと力ある御言により
露に宇宙は造られていた
……

●巻物と七つの封印

それでは、黙示録第5章にいきましょう。今度は巻物です。

[1]**我また御座（みくら）に坐し給う者の右の手に、巻物のあるを見たり。**

「巻物」とは「ビブリオス」という字で、「バイブル」と同じ字です。

その裏表に文字あり、七つの印をもて封ぜらる。

「七つの印」とはここから出ているわけです。

[2]**また大声に『巻物を開きてその封印を解くに相応（ふさわ）しき者は誰ぞ』と呼（よば）わる強き御使を見たり。**

「封印を解く」ということは、

「神秘の世界をそこに開示する」

ということです。封印で隠されたところ、神秘の世界を解くに相応しい者は誰ぞ、ということ。巻物を展開して、解いてそこに中身を現ずる、開現する。展開、開現する者はいるか、ということです。

[3]**然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を見得る者なかりき。**

神さまの大神秘を、ミステリオンを、これを開現することのできるひとは天上天下にいない、という。それはいませんよ、ある一人のひとをのぞいては。

4巻物を開き、これを見るに相応しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きいたりしに、

素晴らしいね、このヨハネというひとは。これは宇宙的悲しみだ、宇宙的な涙です。もし、これを開くひとがいなかったら、すべては空の空なるかな。混沌である、滅亡である。

「混沌と矛盾を開示して、救いへもっていくことのできるのはキリストだけだ」というわけです。惨憺たる歴史だから。人間界ばかりでなくて、人間は自然界までも公害現象を起こさせてしまっている。とにかく、いろいろなことでもって自然界を害ねてしまっている。自然界の法則を破ってしまったから、おかしなことになる。

5長老の一人われに言う『泣くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの萌蘖、すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得るなり。

ヨハネは芝居をしているのではない。本当に泣いていた。泣くまねをしていたのではない。泣いていたら、そういう声が響いてきた。聖書はいわゆるドラマ以上のドラマです。現実は小説以上の小説でしょうが。

「事実は小説より奇なり」

という。だから、ノンフィクションが非常に人に訴えるんだ。

内村先生は小説が嫌いだった。あれは事実ではないからと。本当は、もうひとつ言えば、内村先生は本当の小説が好きだと、逆に言ってあげてもいいくらいだ。現実は小説以上の小説だ、いろいろな不思議なことが事実あるから。本当にドラマです。だから、ドラマティックな表現が一番、真理を表すことになる。ゲーテの『ファウスト』やダンテの『神曲』なんてのがそういうことになる。

「獅子」は権威の象徴です。「ユダの族の獅子」とは、創世記49章でユダの族のことを獅子に例えている。

「1ヤコブその子等を呼びていいけるは汝らあつまれ、我後の日に汝らが遇わんところの事を汝等につげん。2汝等つどいて聴けヤコブの子等よ汝らの父イスラエルに聴け。……8ユダよ汝は兄弟の讃る者なり汝の手はなんじの敵の頸を抑えん。なんじの父の子等なんじの前にかがまん。9ユダは獅子の子の如し。わが子よ汝は所掠物をさきてかえりのぼる。彼は牡獅子のごとく伏し、牝獅子のごとくうずくまる。誰か之をおこすことをせん。」（創世記49・1…9）

とある。「ダビデの萌蘖」はイザヤ書11章です。キリストは

「アブラハムの子、ダビデの子」

といわれている。これはメシヤの象徴です。

●屠られたるが如き羔羊

6 **我また御座(みくら)および四つの活物と長老たちとの間に、屠(ほふ)られたるが如き羔羊(こひつじ)の立てるを見たり、**

と、妙なことが書いてある。「羔羊(こひつじ)」と言ったって、これは小羊ではなくキリストのことです。黙示録は羔羊が中心です。「羔(こひつじ)」という字は妙な字だ。羊を火で焼いておいしいのは小羊だというので、「羔」と書く。漢字というのは面白いような、けしからんようなものだ。漢民族はたいしたものだ。「屠られたるが如き」とあるが、「如き」ではない。正直、屠られたのだから。キリストという羔が十字架で屠られましたから。

「羔は牧者がその懐に抱いてたずさえる」

という言葉がイザヤ書40章（40・11）にあったでしょ。

キリストは、

「私ではありません。あなただけです」

と言って、完全に神さまに従った。ところが、相手が絶対者だから、その従っている姿は本当は最高の自由な姿、天衣無縫の姿なんです。そういう自由は今の人はみな知らん。瓢々たるものです。本当に神に従っていると、瓢々たる自由になる。

羔羊は一番弱い、弱さの極みなんだ。弱さの極みと強さの極みと両方がキリストの表現になっている。

「我れ弱きときに強し」

という。神さまに従っているキリストは最大の英雄です。いかなる英雄もキリストにはかなわない。ナポレオンであろうと、アレキサンダーであろうと、何であろうと、キリストにはかなわない。ナポレオンはセントヘレナで、

「私はキリストに負けた」

とはっきり言っているでしょ。

「あなたは愛の力で天界と地界を本当に結んだ。我執という一番やっかいなものをあなたは焼き殺したようなひとだ。福音書は本ではない、これは生き物だった」

と、さすがにナポレオンだ。彼は最後の瞬間に救われたようなものだ。彼は獅子みたいな奴だけれども、羔羊に負けてしまった。

この羔羊は権威の上では獅子の如き権威を持っている、最大の英雄です。十字架に架かったキリストは最大の英雄です。だから、復活したではないですか。霊体として甦って来た。ローマの兵隊がクモの子を散らすように逃げたではないですか。

「我なり」

と言ったら、彼らはぶっ倒れた。御霊の権威です。しかし、

「お前たち、わけの分からない者のために、私は十字架に架かるぞ」

と、自ら捕まった。

6……之に七つの角と七つの目とあり、この目は全世界に遣されたる神の七つの霊なり。

こういう表現はデューラーが描いているから、デューラーの絵を見てください。さすがに大画家ですね、何か迫ってくる。「目」は聖霊の象徴です。これは霊眼です。「角」は力、霊的な力です。

7かれ来りて御座に坐したもう者の右の手より巻物を受けたり。8巻物を受けたるとき、四つの活物および二十四人の長老、おのおの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前に平伏せり、此の香は聖徒の祈祷(いのり)なり。

神さまに救われて、我々は罪びとでありながら、「聖徒」とされているわけだ。これはカトリックで言うところのいわゆる「聖者」とは違う。カトリックの聖者はみな立派なかたです。聖徒と罪びととは同じことです。生まれつきの自分は罪びとに過ぎない。贖われたる我々は、キリストの十字架と御霊によって聖徒であります。「聖」なんて言って、とり澄ましているのでも何でもない。単なる人間にすぎません、賜りたる聖だから。自分が聖いのではない。キリストの聖を賜っているだけのはなしです。

●キリストの十字架と聖霊を通る

祈りというのは、自分を投げ入れることです。キリストの中に投身する。そして、本当にキリストに祈り込んで、キリストのものとされた者は、今度は人のために祈る。執成しの祈りをする。自分のために祈るのではない。人のために祈る。

「自分はキリストの中に入れられたから、どうぞ良いようにしてください。御意のままにやってください」

と。今度は、人のために祈る。祈りの一番大事なのは、人のために祈ることです。殉教者は人のために祈る――私は殉道という。道に殉じた人たち、キリスト道に殉じた人たち――これは人のために祈る。その棄身の祈りの棄身がこの殉道なんです。道に殉ずることはそれ自身が棄身の祈りであります。祈りもただ言葉ではない。存在的なもの、行為的なものである。

祈りは本当に力を持っています。祈りそのものが力ではない。祈りにかかっているところの御霊が力を持っているから、御霊の力です。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

というのは、

「祈りたることは御霊が働くから聴かれるぞ」

ということです。御霊の働かないような祈りをしたって、これはダメですよ、悪くはないけれども。キリストが、使徒たちが、なさった原始福音の世界の祈りではなくなってしまう。昨日、「どうぞ、皆さん、お祈りください」と言うのに、みな静かにしている。叫んだらいい、

「主さま！　あなたの中に投げ入れます」

と。普段は静かでいいですよ、しかし、時あってか、火山のように爆発するような魂でないと。そのような魂にならないと、この現実はもう、持たないです。

「あの人のそばに行ったら、なにか霊的波動がビリビリきた」

なんていう、そういう存在になってください。

9 **斯て新しき歌を謳(うた)いて言う『なんじは巻物を受け、その封印を解くに相応しきなり、汝は屠(ほふ)られ、その血をもて諸種(もろもろ)の族(やから)・国語(くにことば)・民・国の中より人々を神のために買い、**

「買う」とは「贖う」ということです。

10 **之を我らの神のために国民となし、祭司となし給えばなり。彼らは地の上に王となるべし』**

素晴らしい内容だね。なぜ相応しいかというと、贖いをなさったから、相応しい。

「贖いをなさることは、あなたの他にできない。キリストさま、あなたの他に贖いのできるひとはない」

ということ。キリストの十字架は、宗教的天才が殉教の死を遂げたということではない。キリストの十字架は全然質がちがう。十字架に架かる必要はない、いきなり天界に行けるひとが、止むを得ずして十字架に架かったんだから。

「天の十二軍を降(くだ)し得ないと思うか」

とキリストは言われたでしょ。大変なひとだよな。エリヤは火の車に乗って天界に行ったけれども、キリストはエリヤ以上に天界に行くひとなんです。モーセとエリヤがキリストに現れたでしょ。

贖いをなさったから、あなただけが巻物を解き得る。贖いをなさったあなたが神さまのミステリオンを開示することができる、開現することができると。それを解いたら、今度はエライ事が起きる、審判が始まる。ただ見ている話ではない。ラッパが鳴って、それから恐るべきことが起きる。

ここに、

「祭司となし、王となす」

という大事な言葉が出てくる。「王」は「預言者」でもいい。預言者と祭司。神さまの言葉を伝えて、本当に自由の消息を表す者が預言者です。祭司は人の執成しをする。祈りをもって愛の現実を展開していく。本当のキリスト者は、使徒は、キリストの直弟子は預言者であり祭司である。旧約では預言者と祭司が別れていたけれども、新約になると、キリストの十字架と聖霊を通ると、ヨハネもペテロもパウロもみな預言者であり祭司である。これが本当の使徒です。

●無的実存

「使徒的」ということを内村先生の流れでは、私はほとんど聞かなかった。また今の教会でも、

「使徒的信仰」

ということはほとんど言わないでしょう。なぜ、使徒的信仰（信交）に帰らないのですか、ただプロテスタントのカトリックのと言っているだけで。プロテスタントとカトリックの元は「アポステル」（使徒）、キリストの直弟子の次元ではないですか。だから、私は、

「キリスト直結で行け」

と言う。これが我々、召団の魂です。我々は歴史的な使命を担っているのだから、あなた方の現実において、本当にその証し人、証者であってください。

「私はキリストの直弟子である。我はキリストの無者なり」

ということを証しなかったらしょうがない。ありがたいよ、無者であることを証するのだから。何もなくていいのだから。何かあって、証しろと言うのではない。

「徹底的に無者であれ」

ということ。そうすると、徹底的にキリストが現れてくるから、ありがたいわけです。絶対恩寵の現実です。

私は無者ということを自分でグーッと冥想していると、もう、ありがたくてしょうがない。これは分からんよね、正直。

「小池は無なんて言っているけれども、何だあれは。禅宗の真似をしているのか、虚無主義か」

なんて、何とでも言いやがれ。逆に、

「分かってたまるか」

と言いたくなる。

「十字架と聖霊を受けないで、分かってたまるか。分かったら、それは誤解だ」

という世界です、頭で分かる世界ではないから。

「すべての人に憎まれん」

とキリストが言われたが、

「キリストの聖名のためにはすべての人に憎まれても一向差し支えない。全部、それを愛してやるぞ」

というだけの力を持っている。キリストの現実は、相対的な世界でどうのこうの言っている世界ではない。

屠られ給いしキリストが、これだけが愛の極致を表した。我々は神さまに問われる最後の問は何かというと、

「お前はどれだけ愛したか」

ということです。それの極まっているのは、殉道者たちです。殉道者たちは、天界では最高のところにいます。彼らは本当の棄身の愛ですから。我々も日常の生活でそのような気魄をもって生きなくてはならないわけです。また、生きざるを得ないということにされていく。それを無的実存という。

だから、本当の自由である王であり、また、棄身の祈りをする本当の祭司である。そういう祈りの実存をしていくこと、これが「聖徒の祈り」ということです。

11 **我また見しに、御座と活物と長老たちとの周囲（まわり）における多くの御使の声を聞けり。その数千々万々にして、**

こういうような言い方がやはりダニエル書か何かにあったね。

12 **大声にいう『屠（ほふ）られ給いし羔羊（こひつじ）こそ、能力（ちから）と富と智慧と勢威（いきおい）と尊崇（とうとき）と栄光と讃美とを受くるに相応（ふさわ）しけれ』**

たまらなくて、このように言葉をズラズラ並べたわけだ、ただ言葉ではないけれども。これは交響楽です、一切のものを表現しているわけです。これが「プレローマ」の内容です。羔羊のプレローマの内容が「能力（ちから）と富――富とは金のことではない――と智慧と勢威（いきおい）と尊崇（とうとき）と栄光と讃美とを受くるに相応しけれ」ということ。贖罪の大業を果たし、復活され、聖霊を降した。

13 **我また天に、地に、地の下に、海にある万（よろず）の造られたる物、また凡てその中にある物の云えるを聞けり。**

こういうように、みなが交響楽的に讃美している。ここは大讃美のところだね。御使と被造物が讃美している。

「幾百万の人たちよ、相抱け。星の彼方の神さまに讃美をささげよ」

というわけだ。

曰く『願くは御座に坐し給うものと羔羊とに、讃美と尊崇（とうとき）と栄光と権力（ちから）と世々限りなくあらん事を』

14 **四つの活物はアァメンと言い、長老たちは平伏し拝せり。**

4、5章は盛んなる非常に輝かしいところですね。

●「饗宴篇」の第三歌

藤井先生の第三歌に「巻物」というのがある。そこのところを少し読んでみましょう。

……

御使も鬼もみな価せぬ
巻物を受けて封印を解くに
相応しき者が遂に出でた。
最後の整理を世に施し

新たに宇宙を立て直すに
相応しき者が遂に出でた。
古き造化の骨髄にまで
沁みわたる傷を全て身に負う
羔羊ならで誰かはあろう。
曾ても同じ御手より彼が
苦き杯を受けしごとく
今また巻物を受けとれば
凡ての大いなる驚異より
なお限りなく大いなる驚異
遍く宇宙の旨を満たした
四つの生き物と二十四人の
長老等しく跪きて
彼羔羊の前に平伏す。
長老各々の手には
立琴また焚きものの満つる金鉢
満つるは即ち聖徒の祈り
かくて諸共に際する者ら
声を一つに歌い出づるは
旧き創造に聴くことを得ぬ新しき歌
やがては天地もエルサレムもその市民らも
名も全て等しく新たなるべく
相応しくも汝は在ますかな
巻物を神の御手より受けて
その封印を開き給うに。
そは汝、神の御姿を棄て
僕の形をとりて降り
羔羊の如く屠られ給うた。
かくして血をもて神のために
凡ての族、国語、民また国より贖うことをし
これを我らの神のために永遠に統べ
かつ伝うべき王また祭司となし給うた。
誠に彼らは今より後
嗣業に受けし地の上にて

黄金の鍋をとりもつであろう。
……
天のシオンの聖なる集いに
中天より湧く讃美の響き
大波の如くうねりを打ちて
四方にまろぶとみれば忽ち
淵はまた淵を呼ぶが如く
外なる天の反響を誘い
御座を圍む活物及び
長老たちの尚も周りに
見果てぬ果てまで営を連ねる
御使の総員、千倍の千、万倍の万
その大いなる声、歌と称わんよりはむしろ呻き、
ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ
いかに相応しくもいますかな
屠られ給ひし羔羊（こひつじ）こそは
宇宙を新たに創る力
万有をさえ乏しとする富
天使も怪しむ智慧と勢威（いぎおい）
諸々の名に勝る尊崇（とうとき）
地の果てにまで満つる栄光
また世々の讃美を受け給うに。
……

なかなか素晴らしい文句ですね、そういうわけです。

●十字架・聖霊の二焦点

黙示録2、3章の「七つの教会」――エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤ――のところですが、エペソでは「初めの愛」ということが出てきたわけです。これはまた我々の現実で非常に大事なことです。「七つの教会」に対する言葉は、また我々に大いに語っている言葉でもあります。聖霊に接する時に、これが本当の神・キリストの「初めの愛」になる。もちろん、ある意味において、そうでない場合も初めはありますけれども、決定的な

「初めの愛」

というのは、この聖霊にぶつかったときです。これは愛の霊だから。何か知らんけれども

正直、変えられる。

「初めの愛はまた終りの愛」

でもある。終始一貫という言葉があるけれども、これは始終一貫なんです。

「御霊を受けざる者はキリスト者にあらず」

とパウロがローマ書8章9節で言っている。

「御霊を受けた者はキリスト者なり」

ということです。もちろん、その前に十字架が土台です。その十字架の土台の上に御霊を受けた。これは終始一貫です。

十字架・聖霊は楕円の二焦点です。地球は太陽のまわりをグルグルと楕円形で動いている。もう一つ見えざるところの焦点がある。見えざる焦点は十字架です。こっちの見えている焦点（太陽）は聖霊です。ところが、見えない焦点の十字架ばかりを観念的に言っているのが普通のキリスト教会だ。我々ははっきりと光輝くところの聖霊の世界でもって動いている。十字架を経てからでなければ聖霊は来ませんよ。経なくて来たら、逆に――パウロはその逆なんだ、パウロは聖霊にやられて――今度は十字架がはっきりと見えてきて、

「十字架の他は語るまじと思う」

というくらいに言った。どちらが先であってもいい。とにかく、この二つの事態です。

●無的実存の自由な表れ

この初めの愛がまた終わりの愛であるということ。愛は、終始一貫、貫く。その次のスミルナは、もう、「第二の死」がない。永遠の生命の世界、永生の世界です。ペルガモでは、

「勝を得る者には新しき名を与える」

とある。特にサタンとの戦いがでている。「戦闘」です。我々の地上生活ではこのサタン的勢力と戦わなくてはいかん。サタンの虜（とりこ）になっている人は、サタンからぬけ出させて上げなくてはいかん。

日曜の集会は律法的に守るのではないけれども、女の方は、

「お客さんが来たので、集会に行けません」

なんていうのが多いわけだ。女の方は優しいから、仕方ないけれども。しかし、

「私は日曜の午前は集会があるので、ダメです」

とはっきりと普段から言っておかなくては。お客が来たら、集会に一緒に連れてくればいい。私はいい加減な日曜集会をやっているのではないんだから。また、こういう特別集会には、何が何でもやって来なくては。もちろん私は無理を言っているのではない。いろいろな事情があって、止むを得ずしてどうしても来れない、ということがあるから。そんなことを私は一々言っているのではない。根本精神はそこにあるということを申し上げているわけです。

その次はテアテラ、これは御霊の「権威」です。もちろん、これらは全部、御霊です。エペソは御霊の「初めの愛」、スミルナは御霊の「永生」、ペルガモは御霊の力の「戦闘」です。結局全部、御霊なんです。ただ、その現象体が違っているだけのはなしです。

サルデスは「目を覚ませ」と書いてある。「覚醒せよ」ということ。

「目覚めろ、目を覚ましていろ、盗人のごとくやってくるぞ」

とある。「目覚めよわが魂」ということ。

次は、ヒラデルヒヤ。これは「柱石」かな。神の聖所の柱石となっていること。ラオデキヤは微温でダメだという。しかし、

「悔改めたら御座に坐することを得ん」

という。「熱烈」なる魂、火の如き魂ということ。

聖霊があると、みなこのどれでもがその人を通して展開していく。これは全部、有機体的関係、生命的関係にある。

「終始一貫の愛、永生、戦闘、権威、覚醒、柱石、熱烈」

ということ。これはみな御霊の力の現象です。無的実存がこういうことを自由に表していく。これは、

「私はかく告白せざるを得ない」

という話です。私はこれだけ書いたけれども、これだけに限らない。内容はもっと凄いですから。渾然たるものです。

●万象帰一

エペソ書4章1節、

「1されば主に在りて囚人（めしうど）たる我なんじらに勧む。

パウロは主に在りて囚人である。全然、自由がない。けれども、パウロは本当の自由者であった。

汝ら召されたる召（めし）に適（かな）いて歩み、2事毎（ごと）に謙遜と柔和と寛容とを用い、愛をもて互に忍び、3平和の繋（つなぎ）のうちに勉（つと）めて御霊の賜う一致を守れ。

パウロという人は熱烈な人ですが、「謙遜と柔和と寛容」という世界をちゃんと持っている。御霊を賜っていると、一致ならざるを得ない。みな、てんでんでいい。十人十色でいい。けれども、御霊にあって一つとならざるを得ない。突き抜けているから。突き抜けていると、一つになる。何だかんだと判断していると、一つになれない。

4体は一つ、御霊は一つなり。

エクレシアは一つで、御霊は一つということ。

汝らが召しにかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。

最後の新天新地というのが私たちの「望み」です。終末的希望です。大希望です。この希

望は空しくない。

「御国を来たらせたまえ」

というのは、我々の中に御霊で、御国が来ているから祈れる。キリストを宿していると、これは御国だから。だから、必ず新天新地は来る。世界がどうなろうと、来る。これは我々は本当の勝利者なんです。賜りたる勝利です。だから、その人を通して、のっぴきならない現れ方をしていく。その意味において、

「生きることは戦うことなり」

です。

5 **主は一つ、信仰は一つ、**

全くそうです。

バプテスマは一つ、

聖霊のバプテスマだから。キリストの信を受けとるところは一つなんです。主の信は一つ、主によるバプテスマは一つということです。

6 **凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。」（エペソ４・１～６）**

という大胆な言葉が書いてある。

「これでは汎神論ではないか」

なんて、すぐそういうバカなことを言う。「神が」と言おうが、「キリストが」と言おうが、「聖霊が」と言おうが、いいんです。御霊なる神は超在・貫在・内在・遍在している。

ゲーテは『ヴィルヘルムマイスター』の「ヴァンデルヤーレ」（遍歴時代）の終りの方で、

「宗教には、上なるものに対する畏敬の念がある。民族宗教がそうだ。哲学的世界では、同じものに対する畏敬の念がある。下なるものに対する畏敬の念は、キリストが僕となったから、これはキリスト教である。もう一つある。それは内なるものに対する畏敬の念である」

と言った。「内なるもの」とは内なる聖霊のことです、ゲーテは「聖霊」とは言わないけれども。ゲーテに言わせると、

「本来、神の似姿に造られている自分の姿に対して畏敬の念を持たないか」

というわけです。

自分がないときに本当に、

「天上天下唯我独尊」

の「我」がこれなんです。この我だけがある。天上天下、梵我だけが尊い、宇宙我だけが尊いという。

「我を見よ」

とペテロが言った、あの「我を見よ」がこれなんです。

「わがうちなるキリストを見よ」

と。本当に平伏している魂でなければ、それが言えない。傲慢な魂では言えない。獅子ではダメだ、羔羊にならなければ。

これは結局、互いにみな有機体的な構造になっていることをゲーテは言っている。彼はとにかく大きい魂だから、普通のクリスチャンにはゲーテの大きさが分からない。

「神―自然―我」

ということ。ゲーテは、

「我は神のうちに生き、動き、また在るなり」

という言葉が大好きなんだ。私はゲーテという人をただ人間的に奉っているのでも何でもない。そういう真理を彼は本当につかまえて告白しているから、いいなぁというだけのはなしだ。ゲーテだって欠陥がある人間ですよ。

エペソ書４章１～６節は「一に帰する」という、万象帰一、万法帰一ということです。その「一」はキリストです。そういうことをコロサイ書１章15節以下でも言っているし、ローマ書11章36節でも言っている。

「33ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判（さばき）は測り難く、その途（みち）は尋ね難し。34『たれか主の心を知りし、誰かその議士（はかりびと）となりし。35たれか先ず主に与えて其の報いを受けんや』36これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこしえに神にあれ、アァメン。」（ロマ11・33～36）

パウロは手紙を書いていても、感激してしまうと時々、「アーメン」なんて言ってしまうんだ。

ピリピ書２章10節以下、そこらがみな同じような大きな言葉です。聖書は大変な本だ、正に「ザ・ブック」だ。万巻の書も聖書一巻にかなわない。それは御霊の書だから、神さまの御霊の御言だから。妙に奉っているのではない。

「天地は過ぎ行かん。されど我が言は永遠にたつ」

とキリストが言われた。「言」とはただの言葉ではない。霊言です。実存そのものが、言わざる言ですから。だから、キリストは何も書きはしない。彼が生きていることだけが活字なんだ。活きている文字だ。超一流の人は何も書かない。